



Title	ヴィーダ『キリスト物語』における「語り行為」 : 巻構造との関連から
Author(s)	上月, 翔太
Citation	文芸学研究. 2018, 21, p. 46-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴィーダ『キリスト物語』における「語り行為」

——巻構造との関連から——

上月翔太

1. 『キリスト物語』巻構造の分析

1-1. はじめに

本論文は16世紀のイタリアで著されたカトリック司教マルクス・ヒエロニムス・ヴィーダ (Marcus Hieronymus Vida, 1485-1566) による叙事詩『キリスト物語 *Christias*』⁽¹⁾の巻構造を、「語り行為」に注目して考察する試みである。本作品はキリストの受難と復活をラテン語のダクテュロス・ヘクサメトロスで描いた叙事詩であり、一般にラテン語文学史においては、「古典期以降のラテン文学」、あるいはネオ・ラテン文学として認知されている作品である。一般にネオ・ラテン叙事詩の嚆矢として挙げられるのは14世紀のペトラルカによる『アフリカ』であるが、この作品にはまだ表現やラテン語の使い方にかんがりのルーズさ(中世性)が見られる⁽²⁾。一方で、ヴィーダのラテン語は、文法はもちろんのこと、語法や表現のレベルでも古典作家のラテン語と何ら変わるころはない。それは人文主義的古典研究を踏まえた古典作家の模倣による部分も大きい。しかしながら、この『キリスト物語』は新約聖書の主題を扱う点ではいわゆるウェルギリウスやルカヌスなどの古代ローマ期の叙事詩作家と一線を画している。

本作は全部で6巻構造をとっており、イエス一行のエルサレム到着から、イエスの受難と復活、そして昇天までを歌っている。この6巻という巻数そのものはホメロスの叙事詩が『イリアス』『オデュッセイア』がいずれも24巻、ウェルギリウス『アエネイス』が12巻という古典叙事詩の伝統に対して意図されたものと考えられている。古代のラテン語叙事詩の多くが未完成のままに終わることが多い中、『キリスト物語』は6巻で完結している点で、作品の全体構造について妥当性を以て考察することが可能である。

まずは『キリスト物語』の6巻構造がどのように分析されてきたのかについ

て、諸見解を紹介する。

1-2. 巻構造の区分法

『キリスト物語』の6巻構造の分析には複数の区切り方が提示されているが、大きく分けると6巻を2巻ずつ三区分する方法と、三巻ずつ二区分する方法とに分けられる。まずは三区分法を見ていくことにする。

『キリスト物語』の初の基礎研究を著した Di Cesare は1巻と6巻、2巻と5巻、3巻と4巻の内容やモチーフ上の平行関係を提示している⁽³⁾。あるいはより簡明な区分として、イエスのエルサレム到着から逮捕までを描いた1、2巻、イエス不在の中ローマ総督ピラトに対して行われるイエスの父ヨセフと使徒の一人ヨハネによるイエスの過去についての証言を描いた3、4巻、イエスの受難と復活そのものを描いた5、6巻と内容順に分けることも可能である。また Contzen らは1、4巻、2、5巻、3、6巻の対応の可能性を指摘している⁽⁴⁾。

他方二区分する視点も見ておきたい。とりわけ著名なのが Di Cesare に先立って『キリスト物語』の巻構造について述べた Leopizzi の見解である。彼女は1、3、5巻が「イエスの人間的性質」について、2、4、6巻が「イエスの神的性質」について描いていると説明する⁽⁵⁾。

あるいはヴィーダがウェルギリウスを崇拝していたことと関連して、『キリスト物語』を『アエネイス』同様前半と後半で分けるという方法を試みる論者もいる。すなわち、『アエネイス』が前半6巻は『オデュッセイア』、後半6巻は『イリアス』として構成されたことに倣った分析である。ただし、この区分法の場合、いかなる視点で分割が成されうるのかについての説明において論者の意見がまとまっていないため、ここまで提示した区分法に比べ説得力の点では劣ると言わざるを得ない⁽⁶⁾。ただし、「本質において卓越した個人」イエスを描いた前半3巻とイエスの持つ「世界における役割と人類に対する意義」を描いた後半3巻という内容面からの分割を試みた例もある⁽⁷⁾。

1-3. 先行研究の方法上の問題点

以上で三区分、二区分と『キリスト物語』の巻構造を区分する方法を簡単に確認した。ここから分かることは『キリスト物語』の6巻構造がそもそもあらゆる区分を可能にすることである。いずれの区分方法においても——それぞれに多少の批判はあり得るとしても——、妥当な区分法が提示されていると筆者

は評価する。『キリスト物語』の巻構造はあらゆる分析の可能性を有していることは明らかである。Di Cesare も『キリスト物語』全体における精巧な構造が持つ効果について言及している⁽⁸⁾。

ただし、上記の区分における観点がいずれも物語の内容やモチーフの対応という観点から成されたものであることは指摘されなければならない。『キリスト物語』は福音書をはじめとした聖書の各エピソードを比較的自由に配置した叙事詩である。したがって、各エピソードを幾何学的に配置することで、そのキリスト教的主題を表現した作品であることから、各巻のエピソードの内容の対応関係から作品像を描き出すことは妥当な試みである⁽⁹⁾。しかし、『キリスト物語』はキリスト教成立以前から存在していた言語と詩形で書かれた叙事詩であることを鑑みるに、こうした内容の観点と併せて、それらの物語を語る形式面への考察も欠くべきではないと筆者は考える。

2. 問題提起と方法

2-1. 問題提起

したがって本論文は「語り行為」が作品中でいかなる行為として描かれているかに注目し、その「語り行為」がキリスト教的主題にいかに関わっているかを事例によって考察することを目的とする。これによって『キリスト物語』の巻構造について、叙事詩という形式の面からの特徴を説明することが可能になるだろう。

2-2. 「語り行為」への注目

叙事詩という形式面について考察するにあたり、『キリスト物語』における「語り行為」に注目する根拠は2つある。第一は『キリスト物語』そのものにおいて、このタイトルとは裏腹に作品の大部分でイエス自身が物語の展開上から姿を消し、イエスに関する語りによって占められていることにある。第2巻末尾でユダヤ人群众に捕らえられたイエスは、ローマ総督ピラトのもとに留め置かれることになるが、このピラトにイエスの解放を求めてやってきたヨセフとヨハネの語り第3巻、第4巻全体の内容である⁽¹⁰⁾。これらの場面に登場している人物はこの二人とピラトを合わせた三人である。その後もイエス自身の登場はすぐにはなされず、第5巻の中盤でようやく受難の場面に現れるといった調

子である。その後もイエス自身の登場そのものは散発的なものになっている。

『アエネイス』におけるアエネアスは行為者としてほぼ全巻に渡って登場しているのとは対照的である。しかし、このような『キリスト物語』におけるイエスの不在は「イエスに関する語りの充実」によって埋め合わされ、作品中では様々な人物による「イエスに関する語り」が展開される。この点から本作は「行動者イエス」ではなく「イエスに関する言葉」の叙事詩であると評価することも可能であろう。これが本作の「語り行為」に注目する理由の一つ目である。

もう一つの理由はキリスト教叙事詩における「語り行為」をめぐる文学史的展開である。聖書を叙事詩化する試みは古代末期にはすでに行われていた。最初期に当たる事例が4世紀のユウエンクスによる新約聖書叙事詩⁽¹¹⁾である。この中で彼は自分の作品が（異教的）古典古代の伝統に則った叙事詩であることを強調する。そのことは、彼が自分の詩は「イエスの言葉 Verba」ではなく、「イエスの行動 Gesta」を歌うものであるという表明に現れている⁽¹²⁾。そしてそのことによって、ホメロスやウェルギリウスが過去の英雄を詩的に不死化したのと同様に、イエスを讃えることを企図したというのである。このユウエンクスの立場は、聖書を韻文化するにあたり異教的古代の文学伝統に直接接続した事例であり、後のいわゆる聖書叙事詩人たちもおおむねこのユウエンクス的な方法を採用してきたと言える。その方法はイエスの物語を、アキレウスやオデュッセウス、アエネアスの物語のように扱う立場であり、異教的な用語や表現をキリスト教化するものであった。この方法は古代の叙事詩人たちに倣うものであるので、「語り行為」そのものがキリスト教叙事詩独自の問題として扱われることはないと言える。しかしその後、人文主義作家の叙事詩創作において「語り行為」そのものが文学表現の問題として焦点化されるケースも散見されるようになる。とりわけ顕著なのが、スキピオ・アフリカヌスの活躍を描いたラテン語叙事詩であるペトラルカの『アフリカ』である。内容はリウイウスら古典作家の記述に準じたものになっているため、内容はいわゆる異教的古代の歴史である。ただ、注意すべきは以下の2点である。まず、『アフリカ』はスキピオの活躍を描きながらもアレゴリー的にキリスト教思想を表現している点、そして作中で描かれるスキピオのエピソードはほとんど全てがある話者の直接話法の中に入れられている点である。すなわち、『アフリカ』は一見異教的古代の題材を扱っているが、実にキリスト教的な主題の理解を促すテキストであり、内容のほとんどが「語り行為」の中で展開されてい

るのである。ここから、キリスト教的主題を叙事詩で語る上で「語り行為」に焦点を当てることによって、キリスト教ネオ・ラテン叙事詩の特徴が説明できるのではないかと筆者は考えている。以上は仮説的な想定ではあるが、叙事詩で「語り行為」がいかにか捉えられているかは、このジャンルの文学史的理解を進める上では重要な視点である。

2-3. 分析の順序

本論文はまず中心部に当たる第3巻、第4巻を扱う。第3巻はヨセフによるイエス出生に関わる語り、第4巻はヨハネによる師イエスに関する語りである。まずこの両巻を取り上げるのは、これらの巻が専ら二人の人物による語りによって成り立っているからである。また、二人が行うイエスについて語る、という行為そのものは、イエスの受難と復活を語る『キリスト物語』の語りと重なり合う行為である。したがって、『キリスト物語』の叙事詩としての性質を考察することを目的とする本論文において、この2巻に展開される語りを観察することの意義は大きい。

巻構造という観点からも、この第3巻、第4巻が作品の中心部分に位置していることが重要となる。イエスのエルサレム到着から時系列に沿って展開してきた物語が、この2巻において時系列的には以前のエピソードに引き戻されている。こうした物語展開における時系列の操作は、古代叙事詩においても多く見られるところであり、『キリスト物語』もそういった先行作品の方法に倣った面もあると言える。ただ、先に言及した通り『キリスト物語』が、作品全体を通じて構造的に精巧な叙事詩であることを鑑みるに、これら中心2巻がその他の外縁の巻に対して有する関係を問うこともまた必要であると考えられる。したがって、中心2巻の考察を経て、外縁の巻との関係を「救済史についての語り」を具体的な事例として説明することを試みる。

3. 『キリスト物語』中心2巻における「語り行為」

3-1. 中心2巻の共通点

この中心2巻は構成上そもそも「聖書（とりわけ福音書）的ではない」点で特異なものであると言える。Contzenらもこれらの巻で描かれている場面そのものはヴィーダの創意による部分が大きいと説明する⁽¹³⁾。両巻とも1000行近

い規模で展開され、そのほとんどがヨセフとヨハネの直接話法による語りによって構成されている。

語り手の二人は基本的には双方ともに人間である。またイエスと直接の関係を有している人物である。この場面自体にイエスが登場しない代わりに、こうしたイエスに近い人物に語りを担わせているのである。

また二人とも「イエスの過去」について語っている。ヨセフは自身の家系について説明した後にマリアとの結婚、そしてマリアの受胎とイエスの出産について、それからイエスの幼時の事件をいくつか説明する。ヨハネはイエスとその弟子たちとの関係について語るが、まずイエス誕生のきっかけを神学的な説明から語り始める。それからイエスに洗礼を授けたと言われるバプテスマのヨハネのことを語り、その後弟子たちと行動を共にするようになったイエスの言行を語る。

以上のように大きな枠組みそのものについて第3巻、第4巻そのものは一致している。ただし、この両巻で展開される「語り行為」には互いに全く異なった性質も確認できる。これまでの研究は、第3巻、第4巻の語りの在り方における相違についてほとんど論じることがなかった。したがって以下で、この第3巻、第4巻の「語り行為」の相違点についてより詳細に見ていくことにする。

3-2. 中心2巻の相違点

第3巻のヨセフと第4巻のヨハネの語りにおける相違点について以下では3つの観点から説明したい。すなわち、「語りの内容」「語ることへの態度」「語りの構成」である。

まずは二人の語り手が語る内容そのものに関する相違である。これは「神的イエス」を語る奇数巻と「人間的イエス」を語る偶数巻という Leopizzi の見方に対応するものである。例えば、第3巻ヨセフの語りは受肉したイエスの出生が主題であるのに対し、第4巻のヨハネはそのイエス出生を必要とした原罪のエピソードを持ち出し、イエス出生について神学的な説明を施している。ただし、この違いは第3巻が全く神的な事柄を扱っていないこと、第4巻が人間イエスを扱っていないことを意味するものではない。実際、第3巻には天使がマリアのもとに現れる受胎告知の場面やヨセフが超常的な声を聴く場面も存在している。また誕生したイエスについても——神との関わりの証左であると言える——「光」のモチーフが繰り返し用いられている点からも第3巻のイエスが

人間性の強調のみで神性を除いた表現をされているとは言いがたい。第4巻についても同様の議論が可能である。必ずしも第4巻の神学的なイエスにおいて人間的描写は蔑ろにされていない。したがってこの両巻の証言は——力点の置き方には違いがあるとしても——、等しく「人間イエス」「神イエス」についての証言である。以上、「語りの内容」という観点においては、双方の差異を強調するのは妥当ではない。

ヨセフとヨハネの語りにおける差異を如実に示しているのは、二人の「物語ることへの態度」である。すなわち、イエスに関する証言に対する積極性において二人は決定的に異なっている。この態度の差異を示すべく、以下では彼らの語りがいかに始められたのか、の描写に注目する。第3巻のヨセフは、イエスの出生について問うてくるローマ人ピラトに対し、当初は真実を語ることを躊躇していたのである。

senior paulisper substitit anceps,/sene ultra tegetet quaerenti an proderet illi/et Divi genus et uerum sine fraude parentem,

年長の者(ヨセフ)はしばらくの間迷いのうちにあった。問うている彼(ピラト)にこれ以上秘匿し続けようか、あるいは息子の神的な生まれも、その真の親についても欺くことなく明らかにしようかと。⁽¹⁴⁾

ここでのピラトはイエスの姿の神々しさに感化され、やってきた二人に対しきわめて礼を尽くした態度をとっているのも、そこまでイエスに関する真実を語る上での障壁はそこまで大きなものではない。しかし、ヨセフはイエス出生に関する真実が極めて驚くべきことであると感じているので、はっきり説明ができずにいるのである。このようなヨセフの躊躇を払拭したのが、同伴者であったヨハネであった。彼は躊躇うヨセフを鼓舞する。

*Regia progenies, nymphae dignate superbo/coniugio, quid adhuc haeres?
Absiste uereri./Omnia sublatis aperi iam nubibus ultro./Pone metus
et rumpe moras.*

貴き生まれの方、乙女との高き婚姻に相応しき方よ、これ以上何を躊躇われる？恐れるな。今こそ不安をすっかり取り払い全てを明らかとせよ。恐れを除いて、ためらわずに。⁽¹⁵⁾

この励ましによってヨセフは以下長大なイエス出生のいきさつを語るのである。それを第4巻で継いだヨハネはもちろん自らが語ることに對して躊躇はしない。ただし、ヴィーダはすぐにヨハネに語らせず、彼に一種のインヴォケーションを行わせる。

inde animo mortalia linquens/paulatim oblitusque hominem, penetralia diuum/mente subit coelum peragrans, fruiturque beato/coelituum aspectu omnipotentique aetheris aura,/admissus superam depasci lumine lucem,/ inque Deo tota defixus mente moratur.

死すべきものの諸々を後にして、少しずつ人事を忘却し、彼は心でもって神の統べる天空を巡る。天使たちの至福の光景、全能なる神の吐息を彼は享受する。天の光によって、その光をほしいままにすることを彼は許され、そして、心全てにおいて、神のもとにとどまり続けた。⁽¹⁶⁾

彼は自分の精神を天に巡らせる。ここにヨハネの語りを支える神の權威を確認できる。

こうして双方の語りは始められるわけであるが、さらにはその二人の語りの構成そのものにも大きな違いがある。それは、双方の語りにおける重層性の差異である。第3巻で始められたヨセフの語りは自身の来歴について触れた後に、マリアの受胎告知の話題に移る。ここでヨセフはマリアの語りも直接話法の中に入れて語る。さらにこのマリアも自身が承けた天使の言葉を直接話法の中に入れて語る。含めたため、第3巻は作品の外枠から数えて4段階の直接話法の枠が作られたことになる。第4巻のヨハネの語りでももちろん直接話法が使われるが、ヨセフの巻ほどの重層性はない。むしろ、あとでも指摘するが聖書では本来イエスの直接話法であったものを自らの言葉として語るヨハネが描かれている場合がある。すなわち、これら双方の語りにおいて直接話法による証言の重層性が全く異なっているのである。

以上、ヨセフとヨハネの語りについて相違点を確認した。二人の語りはイエスに関する証言として等しい意義を有している。しかし、総じて「何が語られているか」よりも「どのように語るのか」という「語りの方」について、双方の決定的な差異が明らかになった。

3-3. 中心2巻の「語り行為」の性質

ここまでヨセフとヨハネの語りにおける共通点と相違点を見てきたが、以下でこの中心2巻で展開された「語り行為」の性質について関連するモチーフを挙げる。以下では4つのモチーフを提示したい。「語りへの躊躇」「秘められた言葉とその拡がり」「言葉の隠れ方」「解釈」である。

まずは、先に指摘したヨセフが真実を語るのを躊躇ったのはなぜか、という問題に立ち帰る。イエス出生の神学的な背景を語るヨハネとの対比で、ヨセフが極めて人間的な躊躇を示したとも理解できる。しかし、ヨセフ自身の語りの中に、躊躇うヨセフと同じ振舞いをする人物をもう一人指摘し得る。それが聖母マリアである。彼女は、ヨセフに対し天使との邂逅を語る場面において躊躇いを示す。

cunctatur. Demum incipiens sic ora resolvit:

彼女（マリア）は躊躇った。そしてついにこのように口を開き、語り始めた。⁽¹⁷⁾

彼女が躊躇う最大の根拠は自身の超常的な経験は言っても信じてもらえないものである、という自覚である。

Nam quis narranti rerum miracula credat/tantarum?

というのもこれほどの驚くべき事どもを語る私を誰が信じるというのでしょうか。⁽¹⁸⁾

ちょうど、この一連の出来事をピラトに語ろうとするヨセフにも同じ心境を見ることができる。ちなみに作中ではピラトのローマ人という異邦の出自については強調されているので、読者にはキリスト教的な経験が古代ローマ人ピラトに十分に共感されえないことは提示されている⁽¹⁹⁾。それだけに一層ヨセフの躊躇いがもっともな心情として理解されるのである。古代叙事詩が比較的当然のように描いていた人事への神々の介入をはじめとした驚異譚が、叙事詩である『キリスト物語』で語るに躊躇われる物語として提示されている点に注意したい。

次に指摘するのが、「秘められた言葉とその拡がり」というモチーフである。

これは第3巻、第4巻双方に散見されるモチーフである。例えば第3巻では、マリアが秘めようとした天使の言葉が外部に広がっていく展開が描かれている。受胎告知の事実を語ろうとするマリアはヨセフに「このことを胸に秘めておいて」と依頼する。

obtestor, quae fabor, pectore condas,

どうかお願いします、私がこれから語ることは胸の内に秘めておいてください。⁽²⁰⁾

これを踏まえるに、ヨセフがピラトに語っている内容はマリアによって「秘めておかれた」物語を公にしたものである。あるいは空間の設定によって言葉を秘めたものにする試みも行われた。第4巻では神がイエスの到来を人々に知らせるため、「先触れ」として送り出したバプテスマのヨハネについて最初に語られる。このバプテスマのヨハネが生活をしたのは「人里離れた」場であり、彼は自然の中でイエスの到来を喜ぶ声を発するのを好むと説明されていた。

*Tantum laetificas gaudebat spargere uoces/affatus nemora et montis
ac littora ponti.*

彼の喜びはただ歓喜なす声を広めては、森や山々、海辺に語り掛けることのみであった。⁽²¹⁾

空間的にバプテスマのヨハネの言葉は人々から遮られたものとして最初は提示されている。これがやがて「噂」によって近隣の町の人々に知られるようになる。

Illicet ingens/fama viri circumfusas penetrauit ad urbes.

そこからこの男に関する噂が近隣の町々に大きく広がった。⁽²²⁾

こうして人々はこぞって彼の住む洞窟にまでやってきてバプテスマのヨハネの言葉を求めるのである⁽²³⁾。このように「秘められた言葉とその拡がり」が意識的にモチーフとして双方の語りに描かれている。

さらに進めてこの「秘められた言葉」の「隠れ方」にも注意したい。例えば、先述した第3巻ヨセフの語りにおける重層構造は、語りの構造そのものによっ

て天使という聖なる存在の言葉が第3巻の「一番奥に」秘められていることが暗示されている。この一番深奥の天使の言葉がマリア、ヨセフと伝えられていき、異邦人たるピラトに説明される第3巻全体の展開はまさに「秘められた言葉とその拡がり」を示している。

また別の「隠れ方」も指摘できる。『キリスト物語』内では頻繁にあらゆる言葉について、それが持つ「真の意味」「秘された意味」についての言及が行われる。その一つの事例として、第3巻のヘロデのエピソードを紹介する。イエスが誕生したのち、ベツレヘムを三人の王 *reges* が訪れる。彼らは天の星の動きからベツレヘムに王が誕生したことを知り、その幼子に面会を望んでやってきたのである。その際に王が生まれたのだから、と彼らは当地の王であったヘロデを尋ねる。ヘロデは彼らからその話を聴くと晴れやかな顔でその幼子を讃えるべく見つけるようにと告げるのであるが、彼の言葉が本心とは裏腹なものであることが明確に言及されるのである。

Sic ait et falso simulat nova gaudia uultu.

そのように言うと、彼（ヘロデ）は表情を偽って喜びを新たにしたふりをする。⁽²⁴⁾

ここでははっきりヘロデの「ホンネ」と「タテマエ」が言及されている。ここで提示される言語観として、人の発言には「発言された言葉そのもの」と「その言葉の真の意図」の二つがはっきり存在することがわかる。以上、「秘められた言葉」は発言された言葉そのものが隠される場合もあれば、ヘロデの発言のように、その発言された言葉に「言葉の真の意図」があり得るという状況もまた示されている。

こうした言語観との関連から、言葉の「解釈」というモチーフも強調されてくる。これについてもいくつかのエピソードを通じてはっきり示されている。例えば第3巻最後で行方不明になった幼子イエスが発見された時⁽²⁵⁾に、神殿で神官たちに古代人の預言の解釈を行っていたと説明される場面がある。

*ecce sacerdotum in medio conspeximus illum/.../alta recensentem uatum
monimenta, patrumque/primores ultro scitantem obscura docentemque.*
我々は見たのだ、神官たちのただ中でその子を。彼は預言者たちの古き記

録を読み解き、さらに長老たちに定かならぬことを問い、教えを授けていたのだ。⁽²⁶⁾

あるいは、第4巻でヨハネがイエスの大きな業績として、様々な意に解されてきた過去の預言者の言葉を明快に説明したことが挙げられる。

legiferique aperit uoces animumque magistri.

彼は法をもたらず師の声とその心を明らかとする。⁽²⁷⁾

このように、言葉を正しく理解することの重要性がイエスそのものの行為を通じてアピールされている。

ここまで、中心2巻で見られた「語り行為」の性質について論じた。ただし、最後に「解釈」することに及んでイエス自身の語りについて触れたので、節を改めて中心巻でイエスの語りそのものがいかに扱われているのかを確認する。

3-4. 中心2巻における「イエスの語り」

『キリスト物語』においてイエスは1, 2, 5, 6巻では行動者として登場し、弟子たちや周囲の人々などに語り掛けている場面は描かれている。しかし、今論じている第3巻、第4巻においてイエス本人はこの場面に登場することなく、あくまでヨセフやヨハネの語りの中の一人物として描かれているに過ぎない。では、彼らの語りの中でイエスはいかに語っているのだろうか。

まず指摘すべきは第3巻ヨセフの語りにおいてはイエスの語りはほとんど描かれないうことである。彼の語りには先述の通り天使などの超常的存在の声は多く聞かれるところであるが、肝心のイエスが語り手として描かれることはない。確かにヨセフの証言で言及されるのは幼年のイエスなので、そもそも言葉を話すことができない時期であるとも言えるが、幼年に神官たちに古代の預言の解釈を行っている姿が描かれている点を鑑みるに、ヨセフたちが「語るイエス」を全く見なかったことはないであろう。しかし、少なくとも直接、間接を問わずイエスの語りはヨセフにおいては見られない。

したがって、イエスの語りについて説明するためには、主としてヨハネの語りを参照する必要がある。実際、ヨハネはイエスの語りそのものについて多くの証言を残している。さらに、ヨハネ自身がイエスの語りそのものの性質につ

いてコメントをしている。

nunc caecis uera inuoluens ambagibus ultro,/nunc manifesta palam claro
sermone locutus,

ある時は真実を曖昧な言い回しのうちに覆いつつ、またある時は明晰な話
によって万人にとって明らかになるように語った。⁽²⁸⁾

イエスの言葉は「時に曖昧に、時に明晰に」なされるものであるという発言である。この発言の意味を他のヨハネの証言を踏まえながら考察してみたい。ヨハネの証言の中でイエスの語りが直接話法で言及される場面は数か所ある。これらの発言には共通した特徴が指摘できる。すなわち、「短い、命令法主体の発言である」ことである。これは例えば先行する第1巻、第2巻のイエスの弟子たちへの説教とは異なるものである。ヨハネの証言するイエスの直接話法による発言は「～せよ/～するなかれ」の連続である。特に第4巻の最後には比較的長大なイエスの言葉が直接話法で展開されるが、これもほとんどが命令法によるものであり、非常にシンプルな教えを畳みかけるものになっている。これがヨハネのコメントにおける「明瞭な」教えであると考えられる。それでは「曖昧な」教えとはいかなるものか。

ここで先に見た「解釈者」イエスという役割が意味を持ってくる。すなわち、「曖昧な」教えとは一つには「解釈」を必要とする言葉、言い換えれば「秘められた言葉」であるということである。イエスの教えの曖昧さは常に正しい解釈を必要とすると言われていたのである。この教えの理解に関係して、福音書においては、教えの不明瞭さを払拭するためにイエス自身によるたとえ話が頻繁に用いられている。福音書の中にはたとえ話を通じて教えを伝えるイエスの姿は多く伝えられている。ここでヨハネによって言及された「曖昧な」教えとはひとつにこうしたたとえ話を併用したイエスの教えであると理解することも可能であろう。

ところで、そうしたたとえ話に関連して、ヨハネの語りにおいて興味深い事例が確認できる。第4巻のヨハネの証言において、罪人と関わりを持つイエスについて証言した後でヨハネはイエスをこのように喩える。

Sicut ouem incautus pastor, qui e millibus unam/amisit…

彼はまさに無数の羊から一頭を不注意にも見失った牧人のごとく...⁽²⁹⁾

いわゆる「善き羊飼」のたとえ話である。このエピソード自体は福音書に見られるものである⁽³⁰⁾。ただ、ここで注意したいのは福音書記述ではこの善き羊飼いの喩えをはっきりイエスの言葉として伝えているのに対し、ヨハネはそういった発言主についての言及や暗示を一切なしにして自らの表現として「善き羊飼」のたとえを用いているのである。彼はイエスのたとえ話を使ってイエスを表現したのだ。ここにイエスの言葉を我がものとしたヨハネの姿を見ることができる。ヨハネの弟子としての正統性が「イエスの言葉をそのままに受け継いでいること」に見ることができる。このことは先に触れたヨセフとヨハネの語りの相違点、すなわち重層性の違いにも関連してくるであろう。すなわち、ヨハネの語りがイエスについて単層的な構造であることは、すなわち、ヨハネがイエスの言葉を多く自身の言葉として受け継いでいることを意味する。ヨセフあるいはマリアの語りが天使の言葉を、内奥に秘められた言葉としてしか伝えられていなかった構造とは対照的である。

さて、ここまでで中心2巻における「イエスの語り」の扱いについても確認してきた。ここまでの議論を踏まえ、次から外縁の巻との関係を問いたい。

4. 中心2巻と外縁4巻の関係

4-1. なぜ、ヨセフとヨハネの証言は作品の中心に置かれたのか？

ヴィーダ『キリスト物語』の巻構造における最大の特徴はここまで見てきたヨセフとヨハネのイエスに関する証言が作品の中心に置かれていることにある。もちろん、中心に英雄の父の語りを置くという構成そのものは『アエネイス』の第6巻を想起させるが、実際ヨハネの語りの内容そのものの重みは、アンキセスがアエネアスに語ったローマの栄光の未来の歴史ほどではない。アエネアスに対するアンキセスという関係に相当するイエスの「父」はヨセフよりもむしろ天にいる「父なる神」の方である。イエスとのみ対話する存在として描かれるこの「父なる神」はイエスの受難やその後の復活の栄光について語っている。こうした点からも必ずしも、中心2巻の証言が全て『アエネイス』に準じたものであるとは言えない。では、この中心2巻の意義はどこに求めるべきであろうか。

まずはこの中心2巻に先立つ第1巻、第2巻の内容を簡単に確認したい。これらの巻ではイエスが登場人物として物語に現れ、弟子たちと行動を共にしている。もちろん場合によっては自ら群衆に語り掛ける話者としても登場し、詩人もイエスの語りを普通の人物の台詞として取り扱っている。描かれる出来事は主に、イエスのエルサレム到着やその前後において彼が起こした奇跡、とりわけラザロの復活が描かれている。また、視点をサタン達の会合に移し、イエスの破滅を企てる会合とその戦略が論じられる。再び地上に視点が戻されるや、ユダヤ人の神殿の場面、あるいはいわゆる「御変容」といわれる場面、あるいは第2巻にはユダヤ12氏族の長大なカタログが展開される。その後最後の晩餐に話題が移り、ユダの裏切りとイエスの逮捕が続く。福音書の記述を比較的自由に扱いながらも、基本的な筋は聖書における伝承と大きく異なることはない。あるいはここまでの物語は地獄の記述やイエスの奇跡（例えば死者の復活など）など極めて超常的な物語が描かれているということもできる。こうした神の登場や超常的な出来事を物語っている点で、全体として『キリスト物語』の第1巻、第2巻は内容が聖書の物語であるとはしても、異教的古代的な叙事詩に内容的に近しい作品であると捉えられる可能性が示される。

いわば「聖書の韻文化」は古代末期のキリスト教叙事詩の基本方針であった。散文で書かれた聖書のパラフレーズは多くの先例がある。もちろんその中にはウェルギリウスをはじめとした異教古代の詩人の表現を取り込んだ詩人も存在したが、聖書記述の韻文化、という方法論は大きく異なることはない。ヴィーダ『キリスト物語』第1巻、第2巻も同様の立場に立っていると評価することができるだろう。読み手は「ウェルギリウスを読むように」あるいは「ホメロスを読むように」『キリスト物語』に接することになるのである。

しかし、先行の（あるいは同時代の）聖書叙事詩作家と一線を画すのはこれらの巻を承けて、中心2巻でイエスにまつわる証言をはさむ点である。そしてこれは構成上の問題でありながら、『キリスト物語』全体の理解に関わってくる。先に触れたヨセフとマリアの語りへの躊躇いについて思い起こしておきたい。ヨセフやマリアがイエスに関する真実の語りを最初躊躇ったのは、その真実が信じがたいものであることに由来していた。夢にお告げの声が聞こえ、マリアには輝く天使の姿が生じ、神の息吹を受けることで子を宿すという状況を語ることへの躊躇が明らかに言及されていた。このヨセフの躊躇いは、死者の復活をはじめとした超常的な出来事を扱ってきた第1巻、第2巻の展開に対し

て重要な意義を持つ。

すなわちヨセフの躊躇によって、第1巻、第2巻の物語がいわば詩的虚構として理解されてしまう可能性が提示される。ましてやその物語が異教的古代の叙事詩の韻律で展開されている以上、イエスの奇跡は、ユピテルやアポロンやアレスといった神々が成してきた行為と何ら変わることはないものとされかねない。異教的古代の叙事詩が行ってきた神々の描写は少なくともこの人文主義の時代にあっては、一種の詩的表現でありフィクションの類であると理解すべきものである。ヨセフの躊躇は、一方で『キリスト物語』の描くイエスの言動に関する虚構性を暗示しているのである。

この文学的虚構性の強調は『キリスト物語』に先行する聖書叙事詩にとっても一種の批判として機能し得るであろう。ホメロス以来の伝統の強固な叙事詩にあって、キリスト教詩人は各種要素をキリスト教のものに「置き換える」ことで、聖書を古典叙事詩として表現してきた。しかし、それは古典叙事詩のキリスト教的焼き直しに過ぎず、結果としてキリスト教徒たちが反駁してきた異教的古代の文学の持つ虚構性をそのまま彼ら自身が継承したことにもなり得てしまうのである。ヴィーダの描くヨセフの躊躇はそのキリスト教叙事詩が暗黙の裡に有していた虚構性を露わにしたとも言える。

では、キリスト教的叙事詩がその内容を「真実なるもの」とする、あるいは「信仰にふさわしい」ものとするにはどうすべきなのか、という問題が生じることになる。ここで中心2巻に見られた「語り行為」の性質を踏まえることが必要になる。

すなわち、言葉には秘められた意味がありそれを正しい解釈によって導き出すことが意識的な努力として求められるということであり、その解釈はふさわしいやり方で成されなければならない、ということである。そのモデルがヨハネである。彼は師イエスの言葉、表現を我が物としている存在である。しかも、その理解には神学的な正統性も担保されている。このヨハネの語りを通じて、読み手は『キリスト物語』を読む態度について反省を促されることになる。すなわち、「ホメロス、ウェルギリウスのように」読むのではなく、あくまで「イエスの教え」として読む態度である。理解の仕方によっては虚構の物語に過ぎない各エピソードに適切な解釈を施し、「正しい理解」、「真実としての理解」に至ることが要求されている。特にこの中心2巻の後にはイエスについては受難、地獄における死者の解放と復活、昇天という、非信者にとっては超常的な

事件が続く。これらの物語も聴き手によっては古代叙事詩の神話と変わらない虚構とも理解されうるものである。しかし、「イエスの復活を信じること」の重要性がキリスト教信仰の中に占める重みを鑑みた場合、それを韻文化しただけで古代叙事詩的虚構として認識されてしまう懸念があるのは、望ましい状況ではないであろう。そこで中心巻が「正統な解釈」の存在を提示することで、後半の巻へと読者をオリエンテーションすることを目指したのである。

「解釈」を作品理解の軸として主題化している『キリスト物語』の構造は極めてカトリック的な構造であると評価し得るであろう⁽³¹⁾。

さて、ここまでで読者のことに触れたが、『キリスト物語』の巻構造は常に読者へのオリエンテーションを意図して構成されていると考えられる⁽³²⁾。最後に『キリスト物語』が「読者」をいかに教化し、焦点化しているのかを作品内の事例を示しながら確認する。この中で詩人の行った読者へのオリエンテーションが目指すものも明らかになるであろう。

4-2. イエスの言葉の展開～救済史をいかに語るか

『キリスト物語』内で4か所、キリスト教的救済史が語られている⁽³³⁾。神による世界創造に端を発し、人間の原罪および神の怒り、人類救済のためのイエスの派遣やそのイエスによる世界の救済が——場面によって取り扱う量には差があるものの——語られている。これはいわばキリストの存在が宗教的に有する意味を説明した部分であり、その内容は互いに等しい一方、語られ方は互いに全く異なっている。ここまでの『キリスト物語』の巻構造における議論を踏まえて、該当箇所の「語り行為」に注目しつつ、それらの箇所を見ていくことにする。この中で『キリスト物語』の「読者」がイエスの教えの対象として焦点化されていることが明らかになるだろう。

『キリスト物語』で救済史が最初に明示的に語られるのは、第1巻の後半、ユダヤ人の神殿におけるエクフラシスの場面である⁽³⁴⁾。ここではイエスが壁面に描かれた世界創成の図像を示すことによって進行する。特に弟子に対して説明をした、という状況は描かれず、壁面を指し示すイエスの描写をきっかけとして地の文で世界創成の歴史が描かれていく。ここで注意すべきはこの第1巻におけるイエスの世界創成の歴史及びその後の救済史の説明は、イエスの教えとしては非常に曖昧なものとされていることである。そもそも、イエスが世界創成の歴史を語るきっかけとなった壁面の図像そのものが謎めいたものとして

提示されている。

Non illic hominum effigies simulacraue diuum,/arcanis sed cuncta notis
signisque notauit/obscuris manus artificis, non hactenus ulli/cognita, non
potuere ipsi deprendere uates.

そこには人間の姿も神の似像もなく、職人の手は全てを秘密の記号、謎めいた印で記していて、その時までいかなる預言者たちも自身ではその意を捉えることができなかつた。⁽³⁵⁾

この文字のようなものは古来の預言者たちの解釈を斥けてきたものであるとされる。しかし、イエス自身はその意味をはっきり捉えたとされており、ここに解釈者イエスの卓越性が示されている。ただ、救済史にとって最も重要なイエス自身の犠牲に関する部分については、モーセなど古代ユダヤ人の預言者のエピソードを持ち出して、あくまで暗示的にしか自らの将来の犠牲について説明しなかつた。イエス自身はこのように語っている。

ea, quae subito paucis deprensa sequuntur,/sublegite infandum mihi
portentia letum.

これに続くことどもは少数の者にしかすぐには理解できないが聞いておくがよい、私の忌まわしき死をあらかじめ伝えていたのだ。⁽³⁶⁾

以上のように、ここでのイエスは解釈者としての卓越性を示しながらも、その弟子への教えは必ずしも明瞭なものとなっていない。ここで詩人は、明瞭ではない教えとしてイエスの教えに言及している。

イエスが救済史において担う重要性を明言したのは、第3巻で語られたマリアのもとに現れた天使である。この言葉は第3巻のほぼ中心部に位置し、先述の通り第3巻の語りの重層構造の中の一番奥に位置している語りである。彼の言葉は明瞭にマリアのもとに生まれる子の役割を説明している。

Et quoniam multis olim feret ipse salutem/seruabitque pios,

そして彼はいずれ多くの人々に幸いをもたらし、敬虔なるものたちを救うだろうから⁽³⁷⁾

聖なる存在の言葉であるため、他の人間の登場人物の語りとは必ずしも同一次元で語ることはふさわしくない。ただし、このことは一方で、この天使の語り第3巻の重層構造の内奥にあることの意味を説明しているとも考えられる。本来はこの天使の聖なる語りは通常の間人からはもっとも「秘められた言葉」であるべきである。まして、この天使の語りは光のモチーフとの関連から、マリアの受胎の契機であるとも判断される。イエスの出生を宣言した言葉である以上、他の語りとは一線を画している。ヨセフやマリアが躊躇を示しつつ、しかしそれでもそのまま直接話法で天使の言葉を語ったことにはこうした天使の語りの特殊事情があると考えられる。これまでの議論との関連からこの天使の言葉の意義はこのように指摘できる。すなわち、「聖なる言葉の保存」である。第3巻の「天使の語り」は一見するに第1巻、第2巻で繰り広げられるイエスの驚異譚に連続したものであると言える。しかし、それまでの巻が古代叙事詩の如く詩人の叙述によって展開されたのに対し、この「天使の語り」はその詩人の叙述から直接話法の連続によって隔たれ、「マリアの語り」のうちに内包された構造にある。そしてその中で天使の言葉は「語った通り」に提示されている。この天使の言葉の重要性は、聖なるものの言葉が「語った通り」に保たれていることにある。この聖なるものの言葉そのものについては解釈を必要としない、非常に明瞭なメッセージになっている。ただし、読み手はヨセフが語るのを躊躇ったこの「驚異的な事実」について解釈することを要請されることになる。第3巻は聖なる存在の言葉をそのままに保存し、提示しつつ、その巻に描かれた事件についての解釈を促す展開になっている。

他方、イエスの教えをより詳細に証言する第4巻ではヨハネが師イエスとの回想を語るに先立ってイエス誕生の神学的説明を行う。ここで第1巻のイエスと同様、ヨハネも神による世界創造から語り始める。ただし、その語りはイエスのものと相違点が指摘できる。最も顕著なのが「言葉 Verbum」への言及である。福音書作家ヨハネは他の3つの福音書（いわゆる共観福音書）とは異なって、ロゴスの存在に言及して語り始めているが、『キリスト物語』のヨハネも福音書作家のヨハネと同様はっきり「Verbum」の存在に言い及んでいる。

conceptum arcanoque latens in pectore VERBVM,

秘密の胸に宿りひそみし言葉⁽³⁸⁾

この「Verbum」は第1巻のイエスの説明には一切見られない要素である。むしろ、非言語的な神殿壁面の謎めいた図像のエクフラシスを通じて言及されている点から、ヴィーダの描いたイエスの世界創成の説明がロゴス的な要素を意識的に取り除いている可能性が考えられる。それに対してヨハネは「Verbum」の存在を指摘することでより明瞭かつ神学的な説明を可能にしている。また、こうして始められたヨハネの語りはその後師イエスとの日々の回想を経て、最後にイエスの長大な説教を直接話法で示す。そして、その後が続いて「イエスが歌ったこと」として、「最後の審判」について非常に描写的な説明をイエスの語りとして間接的に進める。

Addidit et uentura canens,

未来のことをも歌い加えて...⁽³⁹⁾

先に福音書作家ヨハネと同様、ここでも黙示録作家ヨハネがこうした展開に関わってきていると考えられる。ただし、彼が語る最後の日の描写はあくまでイエスの言葉であることは改めて確認すべきである。ヨハネはイエスの言葉を正しく受け継いでいる点で正統なイエスに関する語り部なのである。

ここまでイエスの出生や彼の世界的、宗教的な意義についての語り、イエス自身の曖昧な語り、天使の聖なる——そして重層構造の中に秘められた——語り、そしてヨハネによる正統な語りといくつかのヴァリエーションにおいて表れているのを見た。この中でもとりわけヨハネのものが師イエスの言葉をより明瞭にしていることが確認できる。そしてこのヨハネの語りを引き継いだものとして第6巻に群衆が登場するのである。

第6巻、復活のイエスが昇天する場面でそれを目撃する群衆の存在が描かれる⁽⁴⁰⁾。これは歓喜のイメージに溢れた場面であり、光のモチーフはもちろんのこと天使たちの合奏など、芸術的に壮麗な諸々のイメージが描かれている。その中で人々は昇天するイエスを眺めつつ歌うと言われる。その歌においても神による世界の創造とイエスによる人類救済が言及されているのである。

ut nullis mox principiis aut semine nullo/omnia condiderit: coelum
terrasque fretumque,

そして、いかに彼が始まりも種子もなく全てをお造りになったか、天と

地と海を。⁽⁴¹⁾

et rursum potes amissos accendere sensus./Non te uis crudi perterruit
horrida leti,

そしてあなたは失われた感覚を再び新たにすることができる。残酷なる死
のおぞましい力もあなたを恐れさせることはない。⁽⁴²⁾

この世界創成の歌はこれまで言及されてきたものと内容的には相違しないが、
1点ヨハネの語りにおいて明示された「Verbum」がこの歌には見られない。こ
の点については福音書でロゴスに言及したヨハネの特殊性の問題であるとも考
えられる。しかし、この第6巻の群衆の歌には「はじまりのない originis expers」
という表現で世界創成の主体を説明している箇所がある。

semper ut idem ingens regnarit originis expers/cum genitore Deo Deus,
omnia numine complens,

はじまりなきものとして神が、創造の神と共に全てを神の力で満たしなが
ら、いかに偉大に統べておられるのか。⁽⁴³⁾

これはまさに第4巻でヨハネが「Verbum」に対して用いたのと全く同一の表
現である⁽⁴⁴⁾。すなわち、この第6巻の歌は「Verbum」という言葉を使わずに、
ヨハネの語った「Verbum」に対応する世界創成の主体（すなわち神）を歌っ
たことになる。ヨハネの語りは歌う群衆においても共有されているのである。

以上、救済史の語りがイエスに始まり群衆に歌われる、という展開を確認し
た。この展開はイエスの語りが一つの教えとしてヨハネを介し人々に展開して
いく状況を描いたものであると言える。そしてこの展開において「語り行為」
は「曖昧な暗示的なもの」から「それを解釈し教えとして広める語り」、さら
には「その教えを理解し、歌う」行為へと展開していったのである。『キリス
ト物語』における登場人物の「語り行為」は最終的に「神を讃える歌」へと変
容する。「教えを正しく伝えていること」、「その教えが多くの人々に語られ
ること」この二つを実現する語りは『キリスト物語』においては「歌 Carmen」
なのである。キリストの言葉、あるいは父なる神や天使の言葉は「秘められた
言葉」として人間の言葉とは次元を異にしている。しかし、その秘密の言葉を

解き放つ試みが正統とされた時に、その言葉は普遍的に広がる。『キリスト物語』は「キリストの行動 Gesta」を描いた叙事詩ではなく、「キリストの言葉 Verba」が人間たちのうちにどのように展開したのかを描いた叙事詩である。そして、その展開とは秘められた聖なる言葉が、人々のうちで「歌 Carmen」となる過程である。

この過程において読者はまさに正しき「解釈」を踏まえた、イエスを讃える「歌 Carmen」を歌うことへと導かれる。このように『キリスト物語』は古代叙事詩的な驚異譚ではなく、読者個人の信仰の在り方について方向性を与えるキリスト教的、とりわけカトリック的な叙事詩である。あるいは叙事詩でありながらも、読み手をも歌い手とする「賛歌」である。

註

- (1) 引用する本文は Eva von Contzen et al. (ed. and trans.), *Marcus Hieronymus Vida, Christias*, Trier, 2013 による。また引用に附される翻訳は筆者によるものである。翻訳に際し次の英訳も参照した。James Gardner (ed. and trans.), *Christiad*, London, 2009.
- (2) *Brill's Encyclopedia of the Neo-Latin World: Micropedia* s. v. 'Petrarca, Francesco'
- (3) Mario A. Di Cesare, *Vida's Christiad and Vergilian Epic*, New York and London 1964, 193f.
- (4) Contzen et al. *op. cit.*, 32.
- (5) Maria Leopizzi, *Marci Hieronymi Vidae "Christias"*, Cremona, 1935, 19-20.
- (6) Di Cesare, *op. cit.*, 193.
- (7) Contzen et al., *op. cit.*, 31f.
- (8) Di Cesare, *op. cit.*, 197.
- (9) ヴィーダが範としたウェルギリウス『アエネイス』にもモチーフや物語の内容から構造を分析する試みがなされていた。こうした『アエネイス』研究が、ここまでに紹介した『キリスト物語』の巻構造における研究の一つのモデルであったと考えられる。cf. George E. Duckworth, *Structural Patterns and Proportions in Vergil's "Aeneid": A Study in Mathematical Composition*, Ann Arbor, 1962.

- (10) 作品中心における主要な人物であるピラト（ピーラートゥス）については既に論じた。上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』におけるピーラートゥス・エピソード—宗教的相克の物語として」、『神話学研究』第1号、ギリシア・ローマ神話学研究会編、2017年、91-117。
- (11) Juvencus, *Evangeliorum Libri Quattuor*. なお、古代末期の新約聖書叙事詩の取り組みについては Roger P. H. Green, *Latin Epics of the New Testament: Juvencus, Sedulius, Arator*, Oxford, 2006 を参照した。
- (12) Juvencus, *Evangeliorum Libri Quattuor*, Praefatio, 19. なお、ユウエンクスの当該叙事詩については Scott McGill (trans.), *Juvencus' s Four Books of the Gospels*, New York, 2016. を参照した。
- (13) Contzen et al., *op. cit.*, 191.
- (14) 3, 97-99.
- (15) 3, 101-104.
- (16) 4, 4-9.
- (17) 3, 293.
- (18) 3, 296-297.
- (19) 上月、前掲論文、95-101。
- (20) 3, 298.
- (21) 4, 171-172.
- (22) 4, 173-174.
- (23) ヨハネ福音書も最初は先触れとしてのバプテスマのヨハネに言及するも、こうした人里離れた土地についての言及や、噂の存在については言及が全くなされていない。「噂」は本作と古典叙事詩を繋ぐ一つの重要な鍵概念となるので、ここはヴィーダの独創性を見ることができよう。「噂」との関係については Philip Hardie, *Rumor and Renown: Representations of Fama in Western Literature*, Cambridge, 2012, 418f. を参照した。
- (24) 3, 775.
- (25) 福音書においてはルカ福音書 2:41 以下。
- (26) 3, 946-949.
- (27) 4, 797.
- (28) 4, 1031-1032.
- (29) 4, 695-696.
- (30) ルカ福音書 15:3 以下。
- (31) 『キリスト物語』は初期の対抗宗教改革の動きの中において成立した。作中に

明確なプロテスタント批判は見られないがこうした「カトリック的」表現はこの時代状況をカトリック司教として反映したものと見ることもできるであろう。

cf. Susanne Rolfes, *Die lateinische Poetik des Marco Girolamo Vida und ihre Rezeption bei Julius Caesar Scaliger*, Leipzig, 2001, 15-25., Florian Schaffenrath, ‘NARRATIVE POETRY’, in *The Oxford Handbook of Neo-Latin*, Oxford, 2015, 66-67.

(32) Contzen et al, *op. cit.*, 33-36.

(33) 厳密にこれら4か所だけでなく、実際には全巻を通じ様々な表現において言及はされている。ここでは特に重点的に語られる場面を取り上げている。

(34) 1, 582f.

(35) 1, 587-590.

(36) 1, 691-692.

(37) 3, 341-342.

(38) 4, 33.

(39) 4, 981.

(40) 6, 734f.

(41) 6, 746-747.

(42) 6, 785-786.

(43) 6, 744-745.

(44) omnipotens, uerbum finisque et originis expers,/quo mare, quo tellus, quo constat maximus aether./Vtque pater Deus, aequae etiam Deus unica proles.(4, 35-37)下線は筆者による。